

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

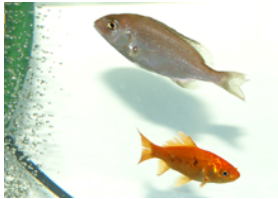
第 399 回 既存の常識を、すべてひっくり返す不思議な水！

2011.01.09

帝国データバンクが2010年10月に実施した「2011年の国内経済活性化見通しに関するアンケート調査」(有効回答数1万1163社)によると、2011年の国内経済を活性化させる道筋と期待できる分野は、「環境・エコ」と回答した企業が66.1%と全体のほぼ3分の2を占めてもっとも多く、日本の環境技術に対する期待がうかがえる。次いで「エネルギー」が57.0%で続き、太陽光発電や燃料電池などの新技術が国内経済を牽引するとした意見が多かったようだ。

(参照:同、調査報告書 <http://www.tdb.co.jp/report/watching/press/pdf/k101201.pdf>)

どうもこれからの時代、従来の発想とオペレーションでいる限り、ビジネスチャンスは訪れそうもない。今まで誰もやらなかった、既存の枠組みでは全く考えられないような発想、これがキーである。



写真をご覧頂きたい。

海で泳ぐ「鯛」と、淡水魚である「金魚」が同じ水槽の中で泳いでいる。かつてこんなことは考えられなかった。

これは岡山理科大学専門学校の山本俊政アクアリウム学科長らが開発した、海水魚も淡水魚も成育できる不思議な水「**好適環境水**」である。

淡水にわずかな電解質を加えることで、海水魚と淡水魚が同じ水槽内で生育できるという。水と体内の塩分濃度の違いから、淡水魚は体内に過剰に水分を取り込まないように、海水魚は逆に水分が出過ぎないように浸透圧を調整しているとのこと、これはもう、びっくりである。これからのニュービジネス、きっと、こんな発想なのだろう。

海水魚と淡水魚の大きな違いは、浸透圧の調整機能だそうである。魚の体液は海水魚も淡水魚もほぼ同じ。そのため、通常でも淡水魚は体液よりも薄い淡水が体内に入り込み、海水魚は体液が体の外へ逃げ出す。これを防ぐため、淡水魚は水を飲まないようにして、尿の形で水分を体外へ排出させる。逆に海水魚は水をどんどん取り入れ、えらから塩分を排出する。わずかな濃度の電解質を淡水に加えることで、この不思議な水ができたという。

もっか、国内・国際特許出願中だそうだが、当然、一刻も早く、是非是非、特許をあげて欲しい！

というのは、この水ができたことによって、大袈裟に言えば、世の中の常識が全く変わってしまう。**農山村が漁村に変わる**・・・山形産のさくらんぼと「秋刀魚(さんま)」が、同時に出荷される、なんて事が、恐らく近い将来実現してしまう。

更に「好適環境水」の養殖業への応用(メリット)では・・・
まず第一に、製造が低コストで可能という点が挙げられる。低コストで飼育ができるという子であれば、マーケットにおける流れが変わってくるかもしれない。
また水資源のみで海水魚の養殖が可能ということは、受精卵から出荷まで海水の必要性がない、水源があれば、どこでも海水魚の生産が可能ということである。貧しい土地で、作物が育ちにくかった山間部にも、新たな産業の創出が期待できよう。

そして、種苗生産から育成・出荷行程の一貫化が可能となり、効率的システムの構築が図られると思う。

更に、罹種に対する選択性が少なく、海水と比較し成長が早い。ということは、魚病のリスクが低く、魚病薬に頼らない有機栽培が可能となるはずである。

また、この不思議な水は、魚種による適合性が広く、微小プランクトンの培養が可能といわれている。そして何よりも、天候に左右されず、計画出荷が可能という点は、大きなメリットである。

今までの常識をすべて屈返すほどの不思議な水、今後をしっかりと見極めていきたい。